
ソシュールにおける言語の科学と解釈学

松澤和宏

〈名古屋大学〉

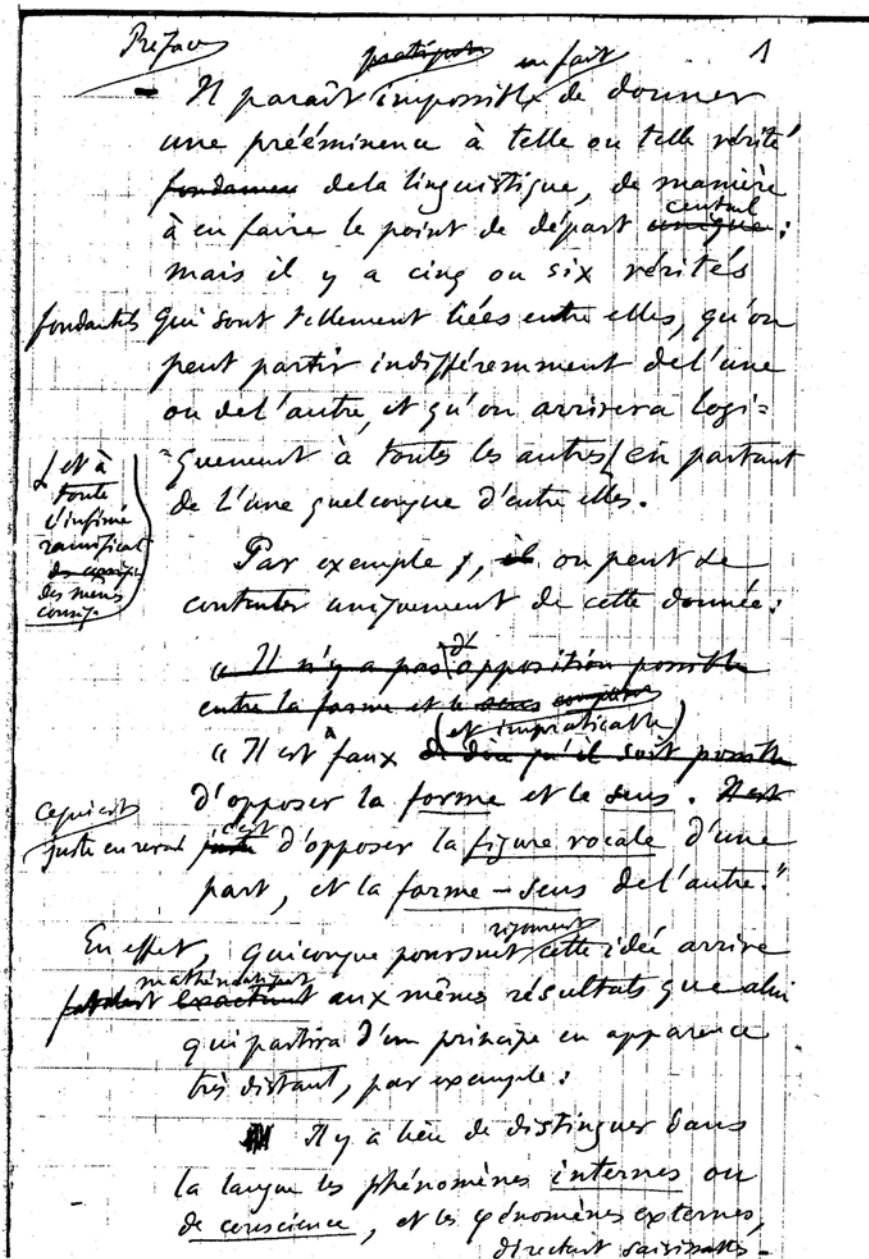
1. ソシュールの逆説的な現代性

長い間ソシュールの思想は、『一般言語学講義』（以下『講義』と略す）において示されている言語学理論とためらいもなく同一視されてきた。二人の弟子シャルル・バイイとアルベール・セシュエによって執筆され、ソシュールの死後3年目にあたる1916年に刊行されたこの著書は、周知のように人文諸科学の歴史において例外的な成功を取めた。『講義』の序文を読むと、執筆者が確信を持って誇らしげに示した立場がどのようなものであったのかよく理解できる。彼らは「ソシュールの思想をその決定的な形において見」と努めたのであり、彼らの「主導的な考えは一つの有機的な全体を作り上げることにあった」¹のである。彼らは、三回に亘る一般言語学講義を融合させて、ソシュールが生前思いもしなかった「一つの有機的な全体」に仕立て上げてしまったのである。1916年のテキストの成立に関わる問題点を孕んだ複雑さは、影の部分をつねに含んだ特異な光の下で、草稿の研究の進捗に応じて少しずつ明らかになってきた。ソシュールの学生の一人、リードランジェの記録には、ソシュールは、1909年1月19日に彼に「こうした主題について一冊の書物を書くことなど考えられません。それは著者の決定的な思想を示さなければならないのですから、とソシュール先生は述べられた」とある。ソシュールの草稿に特徴的な断片性と未完性は、指摘はなされてきたものの、探索されてきたとは言い難く、まともな批評的研究の対象にはなってこなかったのである。ある草稿のなかで、ソシュールは次のような言葉を書き留めている。「私たちが反対に深く確信していることは次のことなのだ。言語の場に足を踏み入れた者は誰しも、天と地の一切のアナロジーから見放されたような思いをするのである」(ELG, p. 220)²。ソシュールに共時言語学、あるいはラングの言語学という言語学の考え方を帰すことは、根拠が不十分であるばかりか正当性を欠いているようにさえ思われる。ソシュールの晩年の沈黙は、ある受難(=情熱)を示しているように思われるのだが、「構造主義の創始者」という強力な神話のために、その受難は広く理解されることはなかったのである。この受難を雄弁に物語る痕跡が草稿なのであり、それこそがわれわれを今日でもなお驚かせ、われわれの関心を惹くものなのである。以下において、ソシュールの断片的なエクリチュールが、新たな解釈学的考察の空間を拓き、一般言語学の理論体系を構築するという直線的思考の自負を問いに付していることを示してみたい。

1 『講義』序文参照。

2 Ferdiand de Saussure, *Ecrits de linguistique générale*, Gallimard, 2002.

2. 「序文」における出発点の不在



以下が「序文」と題された草稿の日本語訳である。削除箇所は省き、加筆箇所は〈 〉で示した。下線で強調されている語句はそのまま復元した。

[第1頁] 〈序文〉言語学のあれこれの真理に、それが〈中心的な〉出発点となるように、優先権を与えることは〈実のところ〉不可能のように見える。しかし五つか六つの〈根本的な〉真理が存在しており、それらは相互に大変緊密に結びついているので、それらのどれからでも同じように出発することができる。そしてそれらの真理の任意の一つから出発して他のすべての真理に、〈また同じ帰結のもたらす無限の枝分かれに〉論理的に到達することができる。

一例を挙げれば、人はもっぱら次の所与だけで満足することもできる。

「形式と意味を対立させることは誤りで〈(さらに実践不可能なこと)〉ある。〈その代わりに正しいのは〉、それは一方では音声形、他方では形式—意味とを対立させることである。」

実はこの考えを〈厳密に〉追求する者は誰でも、外見上は大変かけ離れた次のような原理から出発する者と同じ結果に〈数学的に〉至るのである。

「言語においては内在的な、あるいは意識の現象と、外在的な、直接に把握可能な現象を識別する必要がある。」

果たして「序文」の草稿なのだろうか。草稿をよく見ると斜線によって「序文」という言葉が事後的に加筆されたことがわかる。通常ソシュールは題名を書くときには、紙葉の上部中央に書いているので、「序文」という言葉の紙葉の左上の余白に後から加筆されたという事実は、この草稿が仮初めの、不確かな性格を留めていることを示している。ガリマール版は最初の頁から、未完なもの、一時的なものを決定的なもの、あるいは定着したものに^{ラング}変質させてしまっている。

さてテキストは二つの部分に分けられる。前半では「中心となる出発点の不在」が主張され、その後に「一例を挙げれば」以下それを例示する部分が来る。

出発点の不在という最初の主張が惹起する問題は、第一に、「もはやあれこれの真理に優先権」を与えることはもはやできないということである。ではどこから出発すればよいのだろうか。ソシュールは、冒頭から出発点は幻想だと断じながら自ら出発点を見出さなければならないという厄介な困難に直面していることになる。第二に、この主張は、言語の科学に対して体系の始まりからその終わりへ導くような直線的な進展というものを断念するように強いるもので、言語の科学が循環的な往還の形式のもとに構成される必要性を示している。

3. 音声形／〈形式—意味〉と外在的現象／内在的現象

ソシュールが続いて挙げている例を検討してみよう。ソシュールは果たして音声形が確かな出発点であるのかどうか疑問視している。19世紀の後半では、青年文法学派の影響のもとで「言語を音声現象から捉えることが、言語にアプローチする最も簡単な仕方である」(ELG, p. 33)と一般に考えられていた。ソシュールは、音声形が感覚的で否定しがたい対象であるとの理由で、言語学に経験的な基礎を与えるものだと考える当時の通念を批判している。彼が擁護する主張とは、形式と意味との不可分性であり、これが言語記号を生むのである。ここで注意すべきことは、ソシュールが1890年代の草稿では、〈記号〉という用語を、後に〈聴覚影像〉あるいは〈シニフィアン〉という用語に与える意味で使用しているということである。

ソシュールに従えば、音声形と〈形式—意味〉との識別というこの観念を追究していけば、「内在的あるいは意識の現象と直接把握可能な外在的現象」の識別に関するもう一つの考えから出発する者と同じ結果に至ることになる。この二つの考えの関係についてはしかしながら全く説明がなされていない。しかしソシュールは「意識の」と下線強調し、言語学に固有の対象は内在的現象であることを断言している。〈形式—意味〉と音声形との識別は内在的現象と外在的現象との識別に重ね合わせることができるのである。物理的な現実として、言語は直接把握することができよう、話されている場合には時間において、書かれている場合には空間において。しかし双方の場合において、それらは外在的な現象でしかないのである。言語学の主要な対象は「〈内的で〉心的な領域であり、そこでは記号が意味作用と同様に存在していて、双方とも互いに分離しがたい仕方結びついている」(ELG, p. 83)。なぜなら「語もその意味もわれわれがそれについても意識の外では存在しない」(ELG, p. 83)からである。

ソシュールは、言語を純粹思想と音声形という二つのものにそれぞれ還元しないように警戒している。歴

史的に見れば、ポップによって創始された比較文法学派は、「言語というものを文字の覆いを通じてしか見なかった」。その後が続いたのが青年文法学派であった。この学派は、言葉を話す主体の重要性を認めながら、断固として実証科学になろうとして、音声形という言語の物質的で物理的な要素に可能な限り非物質的な要素を従属させようとしたのであった。言語学の対象を意識の内在的現象として画定しようとするソシュールの営みは、新しい言語学的認識の枠組みを定義し、新たな対象、あるいは更新され、ついに言語（ランゲージ）と命名された対象を扱う規則を含んでいる。

ここで、注意を払っておきたいことは、ソシュールは決して純粹思想の領域の存在を否定はしなかったことである。彼は単に純粹思想が言語学の対象ではないと見なしたに過ぎない。

ソシュールによる外在的現象と内在的現象のこうした識別は、おおよそデイルタイの「自然科学」と「精神科学」の間の原理的な識別にほぼ対応していることは明らかであろう。両者の並行関係は、二人がともに主観性の原理に根本的な重要性を与えていることで明白となる。

しかし〈形式—意味〉の本質が心的精神的で、非物質的であるとすれば、思想と音声形をそうした本質体 *entité* に変えてしまうこの変容はどのようにしてなされるのであろうか。ソシュールは〈形式—意味〉の非物質的な結びつきがどのようなものでありうるのか、説明するのに苦労している。ソシュールが非物質性について語っている場所は次の一節で明らかになる。

ある言語における音の現前は、その構造の要素として、人が想像できるもっとも〈還元不可能な〉ものである。この規定された音の現前は、他の現前する音との対立関係によってのみ価値を持つということ〈示す〉のは容易い。そしてそれこそある言語状態を創出する原理の初歩的ではあるが、すでに疑いを容れる余地のない、〈最初の適用〉なのである。その原理とは、対立の原理であり、あるいは相互の価値の原理であり、あるいは否定的で相対的な量の原理である。(ELG, p. 25)

ここで留意すべき重要なことは、音の相対的規定を対立の原理、あるいは相互的価値の原理の、初歩的ではあるけれども最初の適用によっていることである。ところが、この原理は〈形式—意味〉の問いに先立つ原理としては、まだ提示されていないものなのである。ソシュールが意図せずに巻き込まれているこの動きを、『存在と時間』の哲学者は解釈学的循環と呼ぶことだろう。

「学問的認識は、基礎づけながら証示するという厳密さを要求します。学問的な証明は、基礎づけをするのがその課題であるところのものを、すでに前提することは許されません。しかし解釈は、その都度すでに了解されたものなかで動き、またこのものから自分を育てなければならぬとするならば、循環のなかでうごめくことなく、いったいどうして解釈は、学問的な成果をあげることができましょうか。³

解釈学的循環に囚われたソシュールは、「根本原理」を暗黙裡にしか前提にしていなくても関わらず、その原理に訴えていることになる。人は進むにつれて暗黙の前提に遡行していくのである。なぜなら出発点を、すでに構成されたもの、前提とされたものにとるしかないからである。

4. 話す主体の意識

音声形が形式となるのは、もっぱら他の諸形式との差異の関係においてであるが、この差異が働くのは、話す主体の意識においてでしかない。

？ 根本的な悪循環

3 ハイデッガー『存在と時間』第32節、桑木務訳、岩波文庫、1960年。

話者の意識にとって規定されている音声形は形式と呼ばれている。〈(1) 二番目の言及は、実際には皮相である。なぜならば、意識にとって存在するもの以外のなにもも存在しないからである。(p. 13) したがってある音声形が規定されているとすれば、それは話者の意識にとって規定されているのである。〉(ELG, p. 49)

話す主体の意識とともにソシユールは共時的、静態的な言語学を創始する。これは話す主体の意識に基づいており、精神科学が〈理解〉Verstehenの方法に基づいているのと同様である。しかし「根本的な悪循環？」の問いがその問題点を露呈してくるのは、形式、差異、話す主体の意識の三者の間の関係が問われるときである。形式は話す主体の意識を前提としており、その意識の外部では、差異による規定は不可能である。否定的な差異の記号論の原理は話す主体の意識に基づいた静態の状態を前提としている。この意識の外では、このような原理は言語をして人間精神から独立した存在たらしめてしまうが、これは「独立した生を営む言語的存在という幻想」(ELG, p. 23)を生んでしまいかねない。こうした考えは言語有機体論であり、ソシユール以前にすでにホイットニーと青年文法学派によって厳しく批判されていたものである。しかし話す主体の意識はその代わりにつねに差異的な否定性に触発されており、この否定性がなければ意識は言語現象を識別することはできないだろう。したがって、話す主体の意識と記号論的な差異の原理との間には、〈悪循環〉、すなわち相互作用と相互依存があるのである。

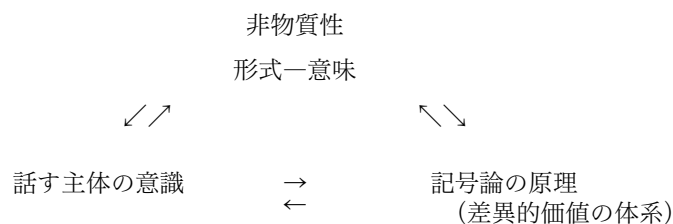
5. 悪循環

(かなり重要：)

言語における辞項ランガージュの否定性テルムは、言語の場所についてなんらかの考えを抱く前に、考察することができる。この否定性〈のために〉、次のことをとりあえず認める〈ことができる〉。すなわち、言語は我々と我々の精神の外に存在するということである。なぜならば、言語の相異なる辞項は、化学的な種その他のような相異なる辞項である代わりに、諸辞項間の規定された差異〈に過ぎないからである〉、ということに単に強調するに過ぎないからである。諸辞項は、この差異がなければ、空虚であり未規定であるだろう。(ELG, p. 64)

ソシユールはここで、叙述の別の順序の可能性を考察している。この別の順序に従えば、言語の場所の前に、規定された差異として相異なる辞項を提示することになるだろう。言語の場所とは「語の場所とは、語が実在を獲得する領域であるが、その実在は純粋な精神であり、それが意味を持つ唯一の場所である」(ELG, p. 83)。

ソシユールは語の場所としての精神を強調していることに改めて留意しておこう。さて、新しい順序に従えば、差異の原理は言語の非物質的な性質の前に来ることになるだろう。ここまで見てきたような叙述の順序の可逆性を以下のように図示できよう。



階層的秩序は崩れて循環的な相互参照に取って代わられる。ソシユールの推論はこうしたいくつかの真理の

循環的な相互依存を言外に暗示している。

しかしながら草稿の読解が分析のこの水準に留まっているならば、それはソシュールが強調していた「言語の二重性」の重要性を取り逃がすことになるであろう。円環がまさに閉じるかに見えるときに、全く別の問いが生じて、ソシュールが陥っている悪循環をいっそう深刻にするのである。

6. 伝統的時間と〈作用史(歴史の働き)〉

ソシュールは「つねに瞬時的な〈言語〉という存在とこの〈言語〉という存在が時間を通して伝承されていくべく運命づけられているという偶発的事実との間の絶対的な分離」(ELG, p. 55)の必要性を指摘している。つまり共時と通時の分離である。共時的観点と通時的観点の識別からすると、上記の図式は暗黙裡に言語の伝承の時間を捨象することを前提にしていることに気づく。もし言語状態が伝達の結果であるとすれば、この時間の次元は外部ではなく、言語状態に内在していることが露わになるだろう。

人は言語学が自然科学の序列に属するのか、歴史科学の序列に属するのか、知るために議論を重ねてきた。言語学は二つのいずれにも属さない。それは未だ存在していないとすれば、〈記号論〉の名称の下に存在すべきであろう諸科学からなる一部門に属する。[中略]という記号論的体系は、〈時間〉に直面するという試練を受けなければならなかった唯一のものである。この〈時間〉は相互の同意によって隣人から隣人へと根拠づけられるばかりではなく、父から息子への強制的な伝統によっても根拠づけられるものなのである。(ELG, p. 262)

時間の三つの相を識別することができよう。すなわち、物理的な時間、歴史的な時間、伝統的な時間である。歴史的な時間とは変化を跡づける日付のある時間である⁴。言語の状態をしっかりと支えるある種の安定性は伝統的な時間の効果、すなわち〈時効〉である。なぜなら、言語がコミュニケーションの単なる手段ではなく、生きた思考とかなりの程度一体化しているためには、「相互の同意によって隣人から隣人へと根拠づけられるばかりではなく、父から息子への強制的な伝統によっても根拠づけられるものなのでなければならぬからである。時間を除外したならば、言語は数ある人為的な取り決めの一つでしかなく、人が望めば訂正できるものであろう。もしわれわれが言語的伝統の中に組み込まれ、そこに根付いていて、その伝統によって働きかけられているならば、われわれはそれをわれわれの前に措定された対象として考察するために、言語的伝統をわれわれから引き離すことはできないであろう。言語的伝統とともに、ガダマーが作用史と呼ぶものに人は関わっていることになる。人は伝承というこの存在論的事実を白紙還元することはできない。伝承されたことの意味論的内容と伝承という行為、すなわち媒介を白紙還元することはできない。価値体系としての言語は、時間の裡にしか究極の正当化をもっていないのである。なぜならこの体系には根拠というものがないからである。有名な「恣意性の原理」をここで急いで思い起こしてみたい。純粋に客観的な観点からすれば、すなわち「シリウス星の視線」からすれば、シニフィアンとそのシニフィエの間には必然性は存在しない。しかし記号の二つの側面の関係は、話す主体の意識には課せられて、伝えられたものとして現れる。ソシュールは『講義』には見られない次のような正当化を示している。すなわち「なぜ私たちは「人」とか「犬」とか言うのでしょうか。なぜなら私たち以前から「人」、「犬」と言い継がれてきたからです⁵。一般言語学の演繹的な体系を樹立することの不可能性は、伝統的な時間という決定的な要因を最終的に認め

4 伝統的時間については、以下の文献を参照。François Rastier, *Arts et sciences du texte*, Paris, PUF, 2001, p. 203 ; Kazuhiro Matsuzawa, « Le « décousu » du troisième cours de linguistique générale et le cercle herméneutique », in *Projet de Ferdinand de Saussure*, édité par Jean-Paul Bronckart, Genève, Droz, p. 61–78.

5 ソシュール第三回講義、エングラール断章番号1235。

